

# 一枚の 地図

最終回



図1



# 「方言」に秘められた地理情報

— GISで表現した方言地図

石川 剛 Go Ishikawa

言語の地理的分布や時空間的変遷を扱う学問が「言語地理学」。そこで特に重要な資料となるのが地域固有の言葉、すなわち方言の分布をプロットした「方言地図」だ。

日本で方言の調査が始まったのは明治時代のこと。戦後、国立国語研究所によって1950年代後半より全国2400地点の調査が行われ、『日本言語地図』が刊行された。その後1979年からあらためて全国807地点の調査が4年がかりで行われ、『方言文法全国地図』としてまとめられた。双方に収められた地図は650点にのぼり、その膨大さを見る者を圧倒する。

今回紹介するのは、『方言文法全国地図』に掲載されているほんの一部のデータをGIS上で表現し直したものだ。

まずは「見ろ」（動詞命令形）を示した図1を見てほしい。一見、地方（東西）によって大別されているように感じるが、随所に特徴的な部分も存在する。

たとえば九州は、「ミレ」「ミロ」と「ミヨ」で見事に二分される。その「ミヨ」は、中部と西日本の太平洋側に偏っており、東日本では日本海側と太平洋側で「ミレ」「ミロ」がくっきり分かれる。同じ新潟県でも佐渡島は西日本的だし、南西諸島はごちゃ混ぜといった様相だ。

たった1つの言い回しでもここまで地域性と多様性があることに素直に驚いてしまう。

さらによく眺めると「ミー・ミ」を中心にして「ミヨ」→「ミロ」→「ミレ」と周辺に広がっているように見えないだろうか。

このような同心円状の分布に対して「方言圏論」という考え方があり、語形変化が地域間で伝播していく様子がモデル化されているのだが、実際は「ミレ」のほうが後から発生した変化で、「見ろ」の場合は「逆方言圏分布」となっているのだという<sup>(\*)</sup>。地図だからこそ分かることもあれば、地図だけでは分からないこともあるのが言語地理学の難しさであり、奥深さでもある。

図2は「高くない」（形容詞否定形）の分布で、東西の境界が極めて明瞭に現れている。これを「東西対立」と呼ぶ。その境界にあるのが日本最大の山脈、日本アルプスだ。同じ視点でもう一度図1を見直すと、自然地形が言語の交わりを阻害する要因の1つになっていることが読み取れるだろう。

ここで東西の境界線が太平洋側で大きく異なっていることにも着目したい。図3（「書かない」（否定辞））では図1・2以上に境界が入り組んでいて、甲信越・静岡がまさに言語せめぎ合いの場になっていることが分かる。また、甲府盆地に「ン」が飛び地状に分布しているのも際立つが、これは富士川水系を使ったかつての水運の影響が指摘されている<sup>(\*)</sup>。

こうした言語地理学におけるGIS利用はまだ始まったばかりだ。上述の東西対立の成因についてもまだ明解な結論に至っていないが、定量的な解析が進めばより核心に近づけるかもしれない。

一方で地理情報としての方言地図は、その背後に途方も無い情報量（たとえば嗜好や風習など）を持っているように思う。社会科学的数据との組み合わせが思わぬ結果につながることも十分にあり得るだろう。その意味で“宝の山”となる可能性を秘めた、非常に興味深いデータなのである。

※：『現代方言の世界』大西拓一郎【著】朝倉書店、2008

データ提供：国立国語研究所 大西拓一郎教授  
[http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/index\\_j.htm](http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/index_j.htm)  
製作協力：(株)東京地図研究社

石川 剛 ● 航空測量会社でGISに携わったのち地図デザインや地理関連情報の提供サービスを手がける。汗と涙で積極行動、思い入れと気合いで不可能を可能とするが身上。北海道大学大学院理学研究科修了、(株)東京地図研究社取締役。



図2



図3